

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム 参加報告書」

京都大学文学部・4年 佐々木 尽

今回、シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラムとして、NUS（シンガポール国立大学）及びYale NUS（シンガポール国立大学 イェール・カレッジ）を訪問したが、大きなトラブルもなくプログラム終了、帰国に至ったことをまず記しておく。以下、①海外での経験、②プログラム内容、③学習成果、④進路への影響、の四点について、簡潔に報告する。

①海外での経験

学業に伴う海外への派遣、訪問が私にとって初めてであり、派遣前には緊張を伴ったが、同プログラムの参加者等、先だってシンガポールに到着した方々のアドバイスを受け、比較的スムーズにシンガポールに馴染むことが出来た。生活を送る上では、独特のアクセントを持ったいわゆる「シングリッシュ」に少し戸惑ったが、それにもすぐに慣れた。NUSの学生との交流は、先方が極めてフレンドリーに接してくれたこと、私の拙い英語を補いながら話をしてくれたこともあり、有益な交流を図れたと感じている。

②プログラム内容

2月15日から18日の4日間、K.C.バッタチャリアと西谷啓治についてのカンファレンスが開催された。昨年10月頃からプログラム参加者及び出口先生が参加した研究会を行い、両者のテキストを読んだ上での、ディスカッション形式のカンファレンスであった。両テキストが非常に難解であり、また西谷のテキストにおいて、私を含めた日本からの参加者が主として英訳ではなく日本語で読んでいたこともあり、序盤は手探り状態でのディスカッションとなった。しかし結果としては、読解および両テキストからの発展を図ることができ、併せて、プログラム以後の研究や交流についての話し合いも進められたため、極めて有意義なカンファレンスであった。

③学習成果

今回のプログラムは、西谷・バッタチャリアカンファレンスへの参加とYale NUSの学生との交流を主たる目的としていた。これらの行事に参加したことで、単純ながら第一に、さらなる英語力の向上の必要性を強く感じた。また第二に、一定の期間、自分の所属していない大学に滞在することで、所属以外の大学への進学、留学の関心が大きく強まった。幸い、来年度から京都大学文学研究科への進学が2月17日に決まったので、これから修士課程に所属するにあたり、海外を中心とした他大学への進学を視野に入れながら研究を進めていきたい。また、今後今回のような派遣プログラムがあれば、積極的に参加したい。

④

③にも記した通り、来年度からの文学研究科への進学が決定している。自分の希望としては博士課程への進学を希望しているため、京都大学だけでなく、広く進学先をリサーチしていきたい。

まとめとして、修士課程への試験の都合で一週間という短い滞在であったが、極めて有意義なプログラムであった。研究分野や進路等、今後の研究に対しても大きな影響を持つものとなった。このようなプログラムの主催・各手続を進めてくださったK U A S Uの方々や出口先生に感謝したい。